
策士な王妃様

鈍色満月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

策士な王妃様

【Nコード】

N0719Z

【作者名】

鈍色満月

【あらすじ】

周辺諸国にその美しさを謳われた美しいお姫様のお話。

望まれて嫁いだ先の国王には既に寵愛を受ける女性がいると、結婚してから知らされ、落ち込むお姫様。

義憤に駆られる侍女達を遠ざけ、ひとり哀し気な微笑みを浮かべるお姫様はハンカチを広げる。

そうして、思うがままに秘めていた感情と吐露しようとして――
|。

ある意味、『黒猫令嬢』と同じ世界観で繰り広げられるスピノフ

です。

よろしければ、是非ごつぞ。

（前書き）

非常に書いてて楽しかったです。

——むかしむかしあるところに、とてもとても綺麗なお姫様が
おられました。

光を浴びて煌めく豊かな銀灰色の髪に、神秘的な紫紺の瞳。

朝一番に降り積もった新雪の様に白い肌に、薔薇色の輝きを帯び
た柔らかな頬。

もし月の女神がこの世におられたとしたならば、きっと彼女の様
な姿であろうと謳われたお姫様。

そんなお姫様が年頃になると、当然の様に周辺諸国からお姫様の
元へと大量の縁談が舞い込みましたのでした。

年頃に成れば、国家間の結びつきを高めるためにお姫様が他所の
国へと嫁ぐのは当たり前の事。

しかしながらお姫様を娶りたいと思っている国と人々の数はお姫
様のお父様であられる王様が思われる以上に多くて、娘想いの王様
は姫君のより良い縁談を望んで頭を抱える毎日。

こうして王様が悩んでいる間に二年もの年月が過ぎ去り、このま
までは大事な娘が婚期を逃してしまうと気付いた王様は、とうとう
決断を下します。

求婚のお手紙が舞い込む様になってから二年目の春。

ようやくお姫様は生まれ育った祖国を旅立ち、大勢のお供とただ
一人の友人を連れて、自らの夫となる相手のいる国へと向かったの
でした……。――。

* * *

「――姫様、いえ王妃様。どうぞお気を確かに」

「気になさる事はございませんわ。相手がどのような女であれ、私達の姫君があんなどこの馬の骨ともわからぬ女に劣る筈がございませぬもの」

「そうですわ、王妃様。陛下もいずれ王妃様のお美しさにお気付きになられる筈です」

周辺諸国にその美しさを謳われた『銀の月姫』。

大勢の男達に乞い願われながらも、ようやくとある王国に嫁いで来たお姫様。

まるで美しい恋物語の様に幸せな結末が待っていた筈の彼女を待ち受けていたのは、思いもしない現実でありました。

「その様な弱気な態度ではいけませんわ！ これは我が国に対しての侮辱も同然！ 直ちに陛下に文をお送りして、この様な縁談は即刻破棄なさるべきです！！」

消沈する姫君を囲んでいた侍女の一人が義憤に耐えかねる表情のまま、叫ぶ。

——それもそのはず。望まれて嫁いだ先の王には、もう既に王の寵愛を受けている女性がいたなんて、ここにいた誰もが知らなかったのだ。

「いいのよ……。聞けば、陛下の寵愛なさる女性は二年も前から陛下のご寵愛を受けておられるとの事。無理に割って入って来たのは私の方ですもの」

儂げな微笑みを浮かべて弱々しく微笑んだ姫君に、周りの侍女達が悔しさを耐えかねる様に「ですが！」と叫ぶ。

しかし姫君が悲しそうな表情で「暫く一人きりにしてほしいの」と訴えれば、主想いの侍女達は押し黙り部屋から出て行くしかない。

納得のいかない表情を浮かべたまま最後の侍女が部屋から退室するまで、お姫様は今にも泣き出しそうな顔で窓の外を見つめていた。

切な気な表情を浮かべ、いつもは神秘的に煌めいている紫紺の瞳は涙で潤む。

どんな荒くれ者であろうと、一目見た瞬間に思わず相手に同情してしまいそうなその面差し。

悲しさに耐えかねる様に、お姫様が顔を伏して繊細な刺繍の施されたハンカチで顔を覆う。

周囲に侍女達もいなくなった今、結婚相手に裏切られたお姫様の感情の発露を邪魔する者はもういない。

「——つぶ、くう……」

堪え切れない嗚咽を堪える様に、姫君がますます顔にハンカチを押し当てる。

美しいデザインの服で覆われた華奢な肩が揺れて、そうして——。

「つぶ、ふふ……。ふふふふふふ。あーはっはっはっはっ！！」

——嘆き悲しんでいた筈のお姫様は、とうとう堪え切れず声を上げて笑い始めたのであった。

「あーはっはっはっはっ！　とうとうやったわ、私は成し遂げたのよ！！」

誰もいない部屋で、ハンカチを片手に踊り出すお姫様。傍目に見れば非常に不気味な光景で百年の恋も冷めてしまいそうな有様だが、幸運な事に目撃者はいない。

それを良い事に、お姫様は今にも歌い出してしまいそうな程晴れ晴れとした表情で、独り言にしては大きすぎる独白を続ける。

「苦節十数年、とうとう私はやり遂げたのよ！　これでもう、男共からうざったい手紙を受け取る必要も無いし、お父様から結婚しろと言われる事も無い。なんて素晴らしいのー！」

軽やかにワルツのステップを踏みながら、お姫様は一人きりの部屋の中を踊る。

——そう、全てはお姫様の望んだ通りに事が進んだのだ。

「うふ、うふふふ。うつふつふつふ」

含み笑いを浮かべるお姫様。

もしこの場にお姫様の信奉者達がいれば、即座に目を逸らしてこれは夢だと自分に言い聞かせるに違いない。

——儚げな眼差し、涙に潤う紫紺の瞳？　生憎、先程まで会った筈の光景こそが幻だ。

「ご機嫌麗しゅう、お姫様。ご計画通りに事が進んで、大層お喜びの様子。あたくしとしても嬉しい限りですわ」

「その通りよ、エバ！　今ならカエル相手でもキスが出来るわー！」

背後に大量の花々が咲き誇ってしまいそうな朗らかな笑みを浮かべて、お姫様が振り返る。

笑顔を向けられた先にいたのは『銀の月姫』と謳われるお姫様と並んでも遜色の無い美女の姿。

紅を差さずとも赤い唇に、妖艶なる輝きを宿した黒檀の瞳。艶めく黒い髪を大雑把に括り、真紅の薔薇で留めている。

大雑把に括っているせいで黒髪が幾筋かうなじに落ちているにも関わらず、それがまた何とも色っぽい。

おまけに真紅のドレスに包まれたふつくらとした胸は、同性異性問わずに一度は見惚れてしまうだろう。

「長かった、本当に長かったわ。ここまで来るのに、何度挫けそうになった事が……！」

でも、これedyやく私は大嫌いな男達に二度と苛まれる事のない生活を送る事が出来るのね……！」

うつすらと歡喜の涙を流したお姫様を、愉しそうな表情でエバと呼ばれた女が見つめる。

「それにしても、本当に残念ですこと。お姫様、いえお妃様ほどのお美しさであれば、どのような男であれ選び放題であられましたのに」

「仕方ないじゃない。カエルとネズミの次に私は男が嫌いな。結婚だなんて冗談じゃないわ」

ふつくらとした薔薇色のほつぺたを膨らませ、お姫様が拗ねた様な表情を作る。

そうすると、それまでの何処か神々の作った精巧な人形の様な姿から一転して、ひどく人間臭くなった。

「だからわざわざ、周辺諸国をリサーチして愛妾のいるこの国を選んだのよ。国王の寵愛を独り占めしている相手がいるのならば、私に手を出さないでしyouから」

「すべて、お姫様の掌の上……と言う事ですわね」

「いいえ。私だけでは無理だったわ。エバ、貴方がいてくれたからこそ、私はここまで来れたのよ」

「勿体無い御言葉でございます、お姫様」

「おまけに私の付き添いまで務めてくれてありがとうございます。そんな貴方と暫く会えなくなるなんて、本当に悲しいわ」

唯一無二の協力者にして、お姫様の大事な大事な親友。

万感の想いを込めた感謝の言葉に、エバはうつすらと微笑んだ。

見慣れた妖艶すぎるその微笑みに、何故か向けられた側であるお姫様の肌に鳥肌が立つ。

しかしそれも一瞬の事だったため、お姫様は気のせいだったと思い込んだ。

「まだまだお姫様に付いていたくもございますが、私はここで帰らせて頂きとうございますわ。」

お姫様とこの国の国王陛下との婚姻式も無事に終わりましたし、あたくしの役目もここでお終い。辞去の挨拶に参りましたの」

「もう帰っちゃうの？ 早すぎるのじゃなくて？」

「ええ。……それに、あたくしも馬に蹴られたくはございませんぬし」

「え？」

ぼそぼそと何かをエバが呟いたが、お姫様の耳には入って来ない。お姫様の当惑を無視したまま、エバは婉然と微笑んでその蠱惑的な声でお姫様を言祝いだ。^{ことほ}

「どうかお幸せに、あたくしのお姫様。素晴らしい結婚生活を送られる事を祈っておりますわ」

「ええ。ありがとう、エバ」

——よくわからないまま、お姫様はにっこりと微笑んだ。

* * *

「……………帰るのか？」

「あら、陛下。顔がにやけておりますわよ」

男女問わずに視線を集めながら、一人廊下を進むエバに声かけられる。

振り向いた先にいたのは、この国の頂点にしてお姫様の結婚相手であられるこの国の陛下であった。

「それも仕方あるまい。なにせ、こちらこそ十年越しの想いが叶ったのだからな」

「うつふふ。悪いお人ですこと。物語の中の悪徳貴族の様な顔をなされておりますわね」

陽光を浴びて朱金に輝く獅子の鬘の様な頭髮に、切れ長の赤銅色の瞳。

よく鍛えられている事がわかる逞しい体に、日に焼けた肌。

まさに太陽の寵児の様な、雄々しくも猛々しい雰囲気的美丈夫。

『銀の月姫』と謳われるお姫様と並べば、さぞかし目にも眩いお似合いの一对になる事間違いないだ。

「それは俺だけに言える事かな？ 貴女がした事を妃が知ったら、彼女はなんと思つものやら？」

「ですから、私は一足先に国に帰りますわ。お姫様にバレて、縛り首にされるのはまっぴらごめんですもの」

道行く人々が、美男美女の二人組にうつとりしながら見惚れている。

しかし、表面上は友好的な微笑みを浮かべている二人の会話を聞

いたら卒倒間違い無しであろう。

「男嫌いの『銀の月姫』。あの方と結婚出来たのはよろしかったですけど、これから先の事まではあたくしは手助けは出来ませぬわ」
「分かっている。十年待ったんだ、これから口説き倒すさ」

ふっふふ、あっはっは、と笑い合う二人。

——お姫様は知らない。

十年も昔、まだ少年だった陛下が滞在先の小さなお姫様に一目惚れしていた事なんて。

愛妾と言われている相手が実は陛下の妾腹の妹で、兄の恋を応援するために見事に陛下の寵愛を受けている女性を演じていたただなんて。

協力者と思っていた親友が娘の嫁ぎ先に困り果てた父王の命を受け、なんとかしてお姫様を結婚させようと企んでいたただなんて。

「ごめんなさいね、お姫様。あたくし、こう見えてワルですよ」

足早に王妃の私室へと向かう国王の後姿を見つめながら、今や異国の王妃と成られた大事なお姫様を思つてエバ・セラーレは蕩ける様な笑みを浮かべる。

——本当の策士は果たして一体誰であつたのだろうか？

（後書き）

>登場人物紹介>

・お姫様

このたび目出度く結婚なされたので、本当は王妃様。外見を裏切って非常に芯のお強いお方。少々事情があつて男嫌いになつてしまつた。二年の結婚延長は彼女の父親への反抗の結果だつたりする。

・陛下

お姫様の結婚相手。お姫様は十年越しの片思い相手だつたりする、ある意味粘着質なお方。この度、無事に意中の相手と結婚する事が出来た。一応、お姫様との面識あり。

・エバ・セラール

『黒猫令嬢』おなじみのあのお人。『黒蝶』とは彼女の事。男嫌いのお姫様の将来を憂えた国王陛下の命令で、お姫様に偽装とはいへ結婚を承諾させた張本人。因みにこれが彼女の『黒』のく試練だつたりした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0719z/>

策士な王妃様

2011年12月2日20時57分発行